

感動と友情の輪を広げて

知的障害者バスケットボール全国大会

8月21日と22日の両日、知的障害者によるバスケットボール全国大会「FIDジャパンチャンピオンシップバスケットボール大会」がホワイトキューブで開催されました。



大会には全国各地から男女21チームが出場。白石市をはじめとした仙南地域からも「仙南スポーツクラブ」の皆さんが出場しました。

最後の1秒まであきらめない、選手たちのひたむきな全力プレーはさわやかな感動を呼び、観客席から盛んな拍手が送られていました。

敬老祝金・記念品贈呈



▲祝詞と特別敬老祝金を贈られた齋藤ひろせさん。市長からの祝詞に感無量のご様子でした。

いつまでもお元気で

9月20日の敬老の日を前に、川井市長が10月1日に満100歳を迎える齋藤ひろせさん(小原)をはじめ、市内のお年寄りのお宅を訪問し、長寿を祝福しました。

市からのお祝いとして、今年度に99歳の「白寿」になられる方には記念品、100歳を越える方には松竹梅敬老祝金10万円が贈られました。

なお、今年度に100歳になられる方には、誕生月に特別敬老祝金100万円が贈られています。

★白石市の長寿者(敬称略・年齢は10月1日現在)

104歳	川口 さと(越河)	99歳	川村 ひさ(長町)
101歳	佐藤たかの(福岡深谷)	"	半田 盛(郡山)
"	草野 とめ(東大畑)	"	佐藤 たか(八幡町)
"	太田 むめ(田町)	"	毛利 ヤイ(福岡八宮)
100歳	片岡 愛子(福岡蔵本)	"	亀岡 たつ(小原)
"	小泉えなよ(小原)	"	鈴木 志な(福岡蔵本)
"	齋藤ひろい(半沢屋敷前)	"	高橋かつ江(大鷹沢大町)
"	佐々木たつ(大平森合)	98歳	半田みよす(郡山)
"	齋藤ひろせ(小原)	"	玉手みよし(白川犬卒都婆)
99歳	山田 ヒサ(越河五賀)	"	日下かつい(福岡深谷)

古典音楽と外国音楽との融合

「大地の礼讃」コンサート



市では9月5日、能楽大倉流大鼓16代大倉正之助氏や琴・沢井流家元沢井一恵氏、アフリカンドラマーのラティール・ルイ氏などの一流演奏者を招き、ホワイトキューブで「大地の礼讃」と題したコンサートを開きました。

コンサートでは、大鼓とアフリカンパーカッションによる豊かな実りへの祈りを込めた共演など、日本の古典音楽とアフリカの打楽器が融合し、従来の古典音楽の域を脱した迫力ある演奏が繰り広げられました。

出演者の皆さんは、コンサートに前後して白石城で音曲奉納を行ったほか、市内5校の小中学生に太鼓の歴史や打ち方などを指導するワークショップも開きました。

碧水園で9月3日に開催されたワークショップでは、白一小と白二小の5年生児童が、大鼓やアフリカンパーカッションの打ち方やかけ声の仕方などを楽しく実体験しました。このワークショップは、大鷹沢小や南中、白川中でも開催されました。



「いのち」を肌で感じました

福岡小でホタル学習会



福岡小学校で9月3日、ホタルを守り育てる活動が続いている「葉師堂ホタルの里を守る会」の協力のもと、5年生児童42人がホタルの生態や生息環境などを学びました。

同校では、昨年からホタルの飼育に取り組み、今年の6月にはホタルの成虫を生息地に放流しています。

指導を受けた児童たちは今後、自分たちでえさとなるタニシを採取して与えるなど、幼虫60匹を飼育していくとのこと。来年もたくさんのホタルが放流できるといいですね。

女子チームも熱戦を繰り広げました

海老名・白石親善少年野球交流



益岡公園野球場で8月21日、恒例の姉妹都市神奈川県海老名市との親善少年野球大会が開催されました。

今年の大会には、姉妹都市提携10周年を記念して結成された女子チームも参加。男子2チームと合わせて3チームが交流試合を行いました。さわやかな青空の下、どの試合も力が入った好ゲームを展開し、友好を深めていました。

10月には白石市の選手が海老名市を訪問し、交流試合やホームステイを通じてさらに友好を深めます。

お年寄りへ心温まる贈り物

福岡老人クラブ連合会がタオル寄贈

8月27日、福岡地区老人クラブ連合会では、社会奉仕活動・友愛活動の一つとして地区内の老人福祉施設、えんじゅと八宮荘にタオルを600枚ずつ寄贈しました。



同連合会の女性部の方々が中心となり、7月から会員にタオルの提供を呼びかけ、15クラブ約650名から1,200枚のタオルを集めました。

「タオルはいくつあっても足りないくらい」と施設関係者。入所者の顔洗いや体ふきなどにさっそく使用していくとのことでした。

私は十月二十四日告示、三十一日投票の白石市長選に立候補しないことを決意しました。以下、その理由を申し上げます。第一は、私の公約の実行であります。一期から三期までは、小中学校の建設と企業の誘致が大きな公約でした。ほとんどの学校の新改築は終わり、誘致企業も十数社を数えました。そして四期目の公約は、全国植樹祭の誘致とそれに伴うキューブの建設でありました。おかげさまでキューブは、利用頻度も高く、質の高いスポーツ・芸術を提供しております。ことに、市民オペラ「ラ・ボエーム」は、音楽関係雑誌はもちろん、マスコミ



川井市長のせせらぎトーク

「引退の言葉」

にまで大きく取り上げられ、白石の文化の高さを内外に発信いたしました。五期目の公約は、公立刈田総合病院の移転・新築でありました。この計画は完全に成功したと認識しております。同時期に建設された仙南中核病院が、まだ五十ベツドがクローズされているのに対し、当刈田病院はベツド稼働率が八十%を超え、平成十六年度には経常収支が黒字になると予想されています。市民に対する救急機能と、地域の中核病院としての役割を十分に果たしております。そのほか、沖の沢郡山線、あるいは越河の農業集落排水事業などはまだ未完成ではありますが、おおよそのメドがつか

つまり、市民に対しての責務は果たしたという認識であります。第二点は、時代が私の政治手法より、若い柔軟性を持った新しい手法を求めていることです。ご承知のように私の政治手法は、アンテナを高く掲げ、最も効率のよい補助あるいは起債を求めて、ワークショップなどの手法により、情報・教育・医療・福祉などを包含する社会全体の仕組みのデザインにより、トータルとしてくらし日本一のまちづくりを目指しました。これは、現在までの手法としては正しかったと思っております。財政力指数が非常に低い当市が、財政の健全性を示す数値が全国有数の高さをもっているというところ、白石市の環境や文化性の高さは、その手法の正しさを証明するものであります。

しかしながら、三位一体の改革により、今、地方政治の新しい理念が問われつつあります。白石が新しい時代を先取りし、豊かな文化と環境を保ちながら、少子高齢化の時代を生き抜くためには、新しい発想と柔軟性をもったかじ取り役が求められていると判断をいたしました。第三は、私の哲学の問題であります。かつて、地方自治の伝道者としていわれた元宮城県知事故山本壮一郎先生が、五期二十年の任期を終わり、七十歳にして惜しまれつつ引退する時の言葉は、「世の中には超えてはならない限界と、超えられない限界がある」ということでした。平成元年四月、私はその言葉を聞いたとき身が震えるような感動を覚えました。これを私流で言い換えれば、「市長としてその在任に超えてはならない矩と、超えられない矩がある」であります。おかげさまで、五十一歳から七十一歳の現在まで二十年、市長としての職務を全うできましたのは、ひとえに市民および市議会の皆さん方のご支援によるものであります。ここに深く感謝を申し上げます。我が愛する郷土白石が、常に小粒でもキラリと光るまちであり続けることを念じ、今限りでの引退声明といたします。